

兵庫県立尼崎の森中央緑地～参画と協働の森づくり～

田川愛・石丸京子（兵庫県立尼崎の森中央緑地パークセンター）

1. 尼崎の森中央緑地ってどんな所？

・ 尼崎臨海地域の過去と現在

兵庫県立尼崎の森中央緑地（以降、尼崎の森）は尼崎市の臨海地域の海に面した場所にある。この臨海地域は昭和時代は工業が盛んな街であり、現在も規模は縮小したがその名残がある。しかし、昭和以前の浜辺には青々とした松林が並び、地引網や潮干狩りができるほど綺麗で豊かな海が広がっていた。畑ではニイモというサツマイモや、武庫一寸というソラマメ、菜種や綿花などの作物の栽培をしており、一次産業も盛んにおこなわれていた。昭和に入ると重工業が主要産業となり、海辺は埋め立てられ、大気や水を汚染していったため様々な公害問題が起こった。昭和末期になると重工業が衰退し、工業地帯に遊休地が発生し始めた。そこへ阪神淡路大震災が発生したため、遊休地が更に増えていった。

・ 尼崎 21 世紀の森構想と尼崎の森

尼崎臨海地域で抱えている大きな課題が 2 点ある。環境問題と地域活力の低下である。公害問題は劇的に改善されたが大気汚染等解決しなければならない課題がいくつかある。また、周囲に自然環境がなく、地域の生き物の生息場所がない。そして、遊休地の発生により昔ほどの活力はなくなっている。この問題を解決するために、「尼崎 21 世紀の森構想」が 2002 年 3 月に策定された。この構想の対象地域は尼崎臨海地域の国道 43 号線以南、武庫川から中島川の間にある約 1000 ha の範囲である。「森と水と人が共生する環境創造のまち」をまちづくりのテーマとして掲げ、その展開方向は①環境の回復・創造、美しい風景の創出、②活力のある都市の再生、③既存産業の育成・高度化と新産業の創造、④豊かな人間性を育み、エコライフスタイルを創造するまちづくり、⑤すべての主体の参画と協働による交流型のまちづくり、以上の 5 点としている。その拠点地区として尼崎の森が存在している。尼崎の森を 100 年かけて人が集まる生物多様性が豊かな森にすることが目下の目標である。（「尼崎 21 世紀の森構想」のその他の詳細は兵庫県ホームページ http://web.pref.hyogo.lg.jp/ks24/wd08_000000001.html をご覧ください）

2. 森づくりの特色

・ 森づくりの 3 つの約束と生物多様性の森づくり

尼崎の森には森づくりをするにあたって 3 つの約束（ルール）が課されている。①地域の森を手本にします、②タネから森を育てます、③みんなの力で育てます、以上の 3 点である。尼崎の森は尼崎の近隣地域である武庫川流域、猪名川流域、六甲山系周辺域、大阪湾岸域の多様な植物群落から種を採取（図 1）し、種から育てた苗を植え、森を育成している。地域産の郷土種を育てることで、地域に元々あった生態系を復元することができ、地域の気候風土に合った植物が育つため丈夫な森を育てることができる。種を採り苗を育て植樹し手入れを進め健全な森にするためには、長いスパンで多くの人の力が必要となる。手間のかかる行動目標のように思われるが、近隣住民の取り組みによって育てられた森が立派に育つと数々の生態系サービスの提供が期待できる。その頃には、森づくりに関わってきた人々が生態系サービスを活用し様々な活動を実施できるようになる。このように地域が育てる森から地域を育てる森へ発展させていくことが目標である。



図1. 種を採る対象地域とモデル林

尼崎の森の森づくりは、人の手で生物多様性の森を作ることも目標の一つとなっている。生物多様性の保全と、その持続的な利活用と利益の公平かつ衡平な配分を目的とした生物多様性条約では、生物多様性を「生態系」・「種」・「遺伝子」の3つのレベルでとらえている。尼崎の森でもそれに沿った森づくりを実施している。生態系：前述の通り、尼崎の森の中に多様な植物群落を形成し、森林生態系だけでなく海浜生態系や草原生態系など多様な生態系を形成している。種：高木、低木、草本など300種類を超える郷土種の植物を植えている。遺伝子：近隣地域で種を採るときは同種であっても複数個体から採っており、遺伝的多様性を重要視している。また、尼崎の森で郷土種を守り育てることで、生息域外保全の場としての役割も担っている。このように、尼崎の森は生物多様性が豊かな森を100年かけて参画と協働により作り出そうとしている全国にも類を見ない取り組みをしている公園である。

・ 尼崎の森の現在

尼崎の森に初めて木を植えてから15年が経った(2021年現在)。初めに植えたコナラアベマキ林の木々は10m近くまで育っており、すでに間伐等の手入れを始めている。2019年度までの森づくりの実績は、植栽樹種は267種、植栽本数は約10万本となっており、目標植栽本数である12万6千本に近づきつつある。しかし、植栽が完了してもその後の除草や間伐などの手入れはしていかなければならないため、立派な森にするためにはまだまだ長い年月がかかるだろう。2015年には大芝生広場が開園し、多くの来場者が集まるイベントも実施されるようになってきた。また、芦屋からかやぶき民家(旧小阪家住宅)を譲り受け移設工事し、昔暮らしの体験もできる施設として活用している。みなの花野は四季折々の野草が楽しめる郷土種の庭となっており、春夏秋は来園者の目を楽しませている。まだ全エリアの開園はできていないが、今後の開園エリア拡大にも期待が高まる。

3. 実施している活動と見ることができる生き物

尼崎の森では森づくりの活動や環境学習、大型イベントや持ち込みイベントを実施している。その中で代表的なものを下記の表1に示す。

分類	活動・イベント名	実施時期	内容
森づくり	森づくり定例活動	毎月第1日曜日, 第3金曜日 9:45~12:00	除草、間伐、植替え、補植など森づくりに関する活動
	森づくり体験講座 ・タネ採りハイキング ・タネまき体験	毎年秋ごろ 全3回程度	森に植える植物のタネを採りに行き、そのタネをまく森づくりの始めの部分を体験できる講座
環境学習	虫捕りイベント	夏頃	地域の生き物に詳しい虫取り名人と虫捕りをする「めざせ！虫取り名人」や、八木先生（人と自然の博物館）と一緒に虫捕りをする「昆虫大捜査線」がある
	あまがさき森っこ活動日	毎月第4日曜日 10:00~11:30	森づくりの活動を中心に森の観察やクラフトをする家族向けの活動
大型イベント	郷土種グリーンフェスタ		郷土種を使った生物多様性の森づくりの魅力を広くPRするためのイベント
	あまがさきモリンピック		間伐材を背負って歩いたり、大きな芝生広場で寝転がって進む等、当緑地オリジナルの競技を楽しむ運動会
	ロハスピクニック		「みんなの小さなエコを大きなコエに」をテーマにした大型イベント

表1. 尼崎の森で実施している活動・イベントの代表例

尼崎の森では植物の植栽はしているが、動物の導入はしていない。動物たちが自ら来るのを待つ姿勢である。これまで対象とする動物の来訪を目的にした植栽は概ね成功している。例えばエノキ林にはその葉を専門に食すゴマダラチョウが来訪し毎年繁殖している。フジバカマには、その花の蜜を好むアサギマダラが今年度初めて10月の渡りの時期に来訪した。他にも訪花性昆虫を誘因するために一部をバタフライガーデンとしたり、水棲動物を定着させるために自然にできた池を整備したビオトープを作ったりしている。その結果、チョウ類やハチ類の種数が増え、トノサマガエルやコオイムシ、トンボ類などの水棲動物も増えている。また、森の木々が育つにつれ夏鳥であるオオルリやセンダイムシクイが山に向かうまでの中継地として利用され始めており、冬鳥のルリビタキも現れるようになった。このように、森の生育に伴い見ることができる生き物が多様化しており、今後も変化が見られると考えられる。



図 2. 尼崎の森で見ることができる動物。土壌動物等はまだまだ貧弱だが、移動能力が高い動物から徐々に集まってきている。今後も変化していくことが予想されるので、ぜひ定期的に観察しに来てください。

尼崎の森を自然が豊かな森にしていくためには多くの人の力が必要です。
ご協力いただける方には森づくり等、尼崎の森で実施しているイベントの情報を
お送りいたしますので、メールのタイトルを「メールマガジン配信希望」とし、
下記アドレスに空メールを送ってください。

event_amamori@hyogopark.com

QRコードを読み取ると
メールを作成できます。→

